

成人看護学実習（慢性期）におけるポートフォリオ活用

山田 香¹⁾・遠藤 和子¹⁾

A practice on the application of the portfolio in adult nursing practice (chronic illness and conditions)

Kaoru Yamada, Kazuko Endo¹⁾

ABSTRACT

We were the introduction of the portfolio as a tool to strengthen the reflection in adult nursing practice (chronic illness and conditions).

It is impressions after use of portfolio, Students had been back at the self of practice on objective. And, they had to realize their own growth. Clinical nurse, feel had, student learning, thinking, difficulty, fear, joy came to be visualized. And became a specifically lead easily. Teachers felt, students were able to setting day-to-day goal and reflection specifically. And the progress of the student self-learning has become more visible.

From the above, he portfolio is effective tool for visualization and reflection of the learning process in the nursing practice.

In the future, there is a problem of practice environment. While considered by three parties of students, clinical and teachers want to explore effective ways to use.

1. はじめに

近年の保健・医療・福祉をとりまく社会情勢の変化にともない、看護系大学には確かな専門性と豊かな人間性を兼ね備えた看護職者の育成が期待されている。それに応えるべく文部科学省がとりまとめた「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時の到達目標」¹⁾では、看護実践を構成する5つの能力群とそれぞれの群を構成する20の看護実践能力が定義されている。

本学では、平成25年度から成人看護学実習（慢性期）において、「コアとなる看護実践能力」を踏まえて実習目標を整理し、その一部を変更した。その際、『看護実践における自己の行動を振り返

り、看護者としてのあり方や看護観を深め、自己の課題を明確にする』を目標の1つに挙げ、実習におけるリフレクションの強化を図るためのツールとしてポートフォリオ²⁾を導入した。

本稿では、成人看護学実習（慢性期）におけるポートフォリオ活用の実際を紹介するとともに、活用に関する学生・臨床指導者・教員の感想、ポートフォリオの記入内容から、本実習におけるポートフォリオの教育的効果および今後の課題について報告する。

1) 山形県立保健医療大学 保健医療学部 看護学科
〒990-2212 山形市上柳260番地
Department of Nursing,
Yamagata Prefectural University of Health Sciences
260 Kamiyanagi, Yamagata-Shi, Yamagata, 990-2212, Japan

(受付日 2015. 12. 21, 受理日 2016. 2. 8)

II. 本実習の概要

今回、ポートフォリオの導入を行なった成人看護学実習（慢性期）は、本学看護学科3年次後期～4年次前期に開講される領域別実習のうちの1つである。

実習期間は3週間で、実習病院の内科系病棟において1名以上の患者を受け持ち、看護過程を展開する。患者の生活史や複数の疾患による影響を踏まえた、慢性期看護に特有の対象理解に基づいて看護計画を立案・実施し、看護実践を振り返りながら看護計画を評価・修正する。修正した看護計画を再度、実施・評価することを繰り返し、より良い看護実践を見出していくプロセスを学ぶ実習内容となっている。実習記録は、看護過程展開の記録用紙と、ポートフォリオの2つである。実習展開においては、学生間のカンファレンスおよび臨床指導者、教員を交えたカンファレンスにおけるディスカッションを通して問題解決を図れるよう意識づけしている。実習の終盤では、カンファレンスを重ね、看護実践における具体的な体験を学生間で共有しながら段階的に言語化・抽象化し、慢性看護の重要な概念として捉えられるような展開としている。これらにより、実習全体を通して、学生の思考力、実践力が向上することを意図している。

III. ポートフォリオの概要

1. 準備

1) 学生への説明

実習開始1週間前の学内オリエンテーションにおいて、実習目的・実習目標・実習方法とともに、ポートフォリオについて以下の説明を行っている。

- ①導入の意図：実習目標の達成のためのリフレクション強化のツールである
- ②活用方法：毎日の実習の振り返りに役立つ。学習の進捗状況を臨床指導者、教員と共有する。実習全体の振り返りのため、最終日の面談で使用する（提出は不要であり、評価対象ではない）。
- ③様式：各シートの記入方法について具体例を挙げながら提示する。
- ④ルール：時系列に入れることのみであり、何を

書いても何を入れてもよい。

- ⑤感想の記述：試験的な取り組みであることから、実習終了時にポートフォリオについての感想を記述してほしい。

2) 実習指導者との調整

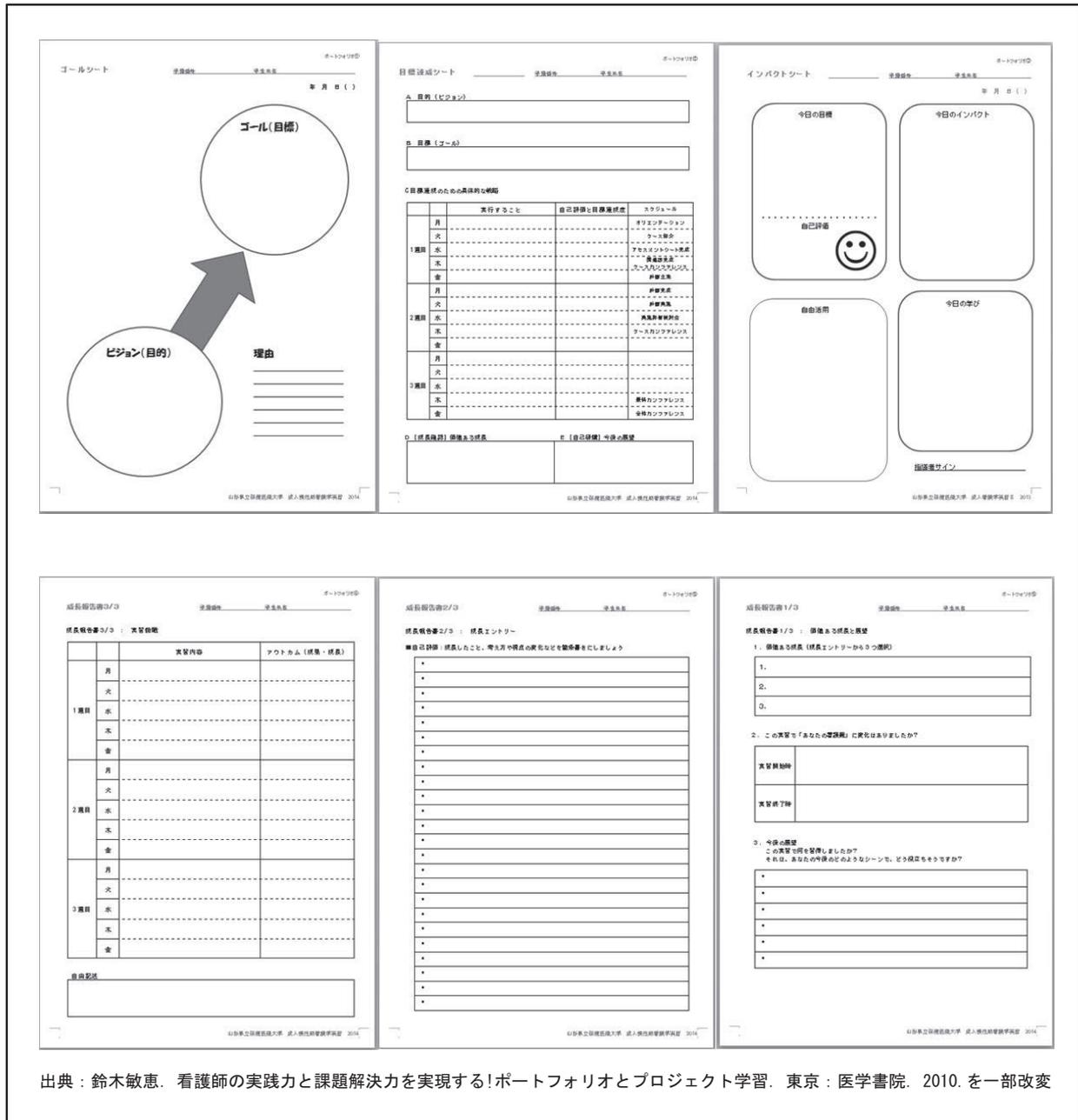
ポートフォリオの記述については、看護過程に沿って学生が感じたり考えたりしたことを自分の言葉で自由に表現し、看護援助を創造する力が発揮されるよう、教員・指導者が関わる方向で事前の打ち合わせを行った。特に、インパクトシートの「本日の目標と自己評価」以外の欄については、学生が記述する内容の自由度が高いこと（実習で体験した幅広い内容、イラストなどの多様な表現などの許容）を確認した。

3) 倫理的配慮

学生に対しては、1)の学生への説明の際、試験的な取り組みのため内容や感想をまとめて学会等で発表すること、実習以外の目的でのポートフォリオ参照の拒否（研究目的での参照の拒否）も可能であること、参加不参加は成績評価とは無関係であり拒否により不利益を被らないこと、発表の際、匿名性は守られることを含めた内容を口頭で説明し、了承を得た。臨床指導者と教員に対しては、実習開始前の打合せの際、ポートフォリオの導入の説明と合わせて、試験的な取り組みのため内容や感想をまとめて学会等で発表すること、参加不参加は自由であり拒否により不利益を被らないこと、発表の際、匿名性は守られることを含めた内容を口頭で説明し、了承を得た。

2. ポートフォリオの構成と内容（図1参照）

- 1) ゴールシート：実習の1～2日目で記入、受持ち患者の目標（ゴール）を設定する。
- 2) 目標達成シート：ゴールシート記入と同時に、ゴールシートの目標達成のために（受け持ち患者がそのような状態になるために）、学生は自身がどのように実践するのか、またはどのような学習が必要なのかを計画し記入する。これによって、実習全体を見通すことを意識づける。
- 3) インパクトシート：毎日の実習で1日1枚記載するシートである。①本日の目標と自己評価 ②今日のインパクト ③今日の学び ④自由活用欄 の4つの欄が設けられており、



出典：鈴木敏恵. 看護師の実践力と課題解決力を実現する!ポートフォリオとプロジェクト学習. 東京：医学書院. 2010. を一部改変

図1. ポートフォリオの構成

学生は実習時間中に気づいたことを随時記入する。実習時間終了時に1日のまとめとして臨床指導者・教員に提示し、臨床指導者と教員それぞれからのフィードバックを受ける。その際、ファイルに挟み込んだ状態で提示することによって、前日の様子や実習の経過がわかるようにしている。

- 4) 成長報告書1：実習の中での自己の学びを実習計画に合わせて書き出せる内容となっており、3週間分の日々の目標や達成度が1枚のシートで俯瞰できる様式となっている。
- 5) 成長報告書2：学生自身が成長したと感じた

ことをその都度、箇条書きで記入する。

- 6) 成長報告書3：実習終了時に、インパクトシート、成長報告書1・2をもとに、実習全体を振り返り、学生自身が考える「価値ある成長」「看護観の変化」「今後の展望」について記入する。
- 7) その他：学生が実習中に活用した資料や記録の下書き等をインパクトシートと同様に時系列に挟み込む。

表 1. 学生からの感想：インパクトシート n=51 人（複数意見あり）

内 容	人 (%)
書くことが楽しい・フェイススケールで和む・自分なり自由にアレンジして記入できるのがよい	31 (60.7)
毎日の目的、目標、評価などが明らかになり、自分の行動や考えを具体的に振り返ることができた	27 (52.9)
看護過程の記録用紙には書ききれないこと（看護技術の自己課題、患者家族の反応、臨床指導者・教員からの指導内容等）を色々書けた	16 (31.3)
実習中に考えたことや実習内容を綿密に思い出すことができる	13 (25.4)
資料やメモが増えていくので、自分の頑張りが実感できる	11 (21.5)
自分の考えや行動がどのように変わったのかわかる (例「見えていることだけに着目していた自分→見えていないことをどうするかを理解できた自分」)	7 (13.7)
最初はインパクトシートに書く内容がわからなかった	6 (11.7)
たくさん書いてしまうので、時間がかかってしまう	5 (9.8)
毎日書くのが大変	4 (7.8)

表 2. 学生からの感想：成長報告書 n=51 人（複数意見あり）

内 容	人 (%)
自分の成長や次の課題・今後の展望を見出すことへとつながった	26 (50.9)
成長を書き出すことで「成長した」という実感が湧く・自信になった	18 (35.2)
自分の看護観の変化が感じられた	16 (31.3)
(成長報告書 1 を書くため) 毎日自分が何を学んだか少しでも成長したかを意識するようになった	6 (11.7)
同じような内容を書く欄が多い	4 (7.8)
どう成長したのかわからなくなった・成長していないかもしれないと思った	2 (3.9)

IV. ポートフォリオ活用後の学生の反応と臨床指導者・教員の受け止め

実習終了後、学生のポートフォリオ活用に関する自由記述を単純集計し（表 1・2）、実習中の様子と合わせて学生の反応を整理した。臨床指導者・教員の受け止めについては、実習終了後の検討会において意見交換した内容を整理した。なお、成長報告書は実習最終日の個別面談でのみ使用するため、臨床指導者の感想・意見は得られていない。

1. インパクトシート

1) 学生の反応（表 1 参照）

インパクトシートは 1、2 年次の基礎看護学実習で使用した毎日のまとめの内容（本日の目標・一日の振り返り）を含んだ様式のため、学生の受け入れはスムーズであった。記入スペースが大きいことや自由活用欄があることにより、学生が実

習を通して考えたこと、感じたことを、文章だけでなくイラストでも表現していた。「看護過程には書ききれないことを色々書けた」「毎日自分の行動や考えを振り返ることができた」等、提供した看護技術の振り返りや患者の言動など自己の看護実践内容に関わるものが詳細に記載されており、それらをもとに翌日の実習目標を設定していた。シートの特徴である「今日のインパクト」は、これまでの実習では記録したことのない内容であったため、初日は戸惑いがみられたものの、患者・家族の様子や看護師の実践を見学して感じたこと、学んだこと、実習で見聞きしたことが多岐にわたって記述されており、実習での豊かな体験を書きとめられるツールとしての活用がみられた。結果として記録量が増えることになったため、ごく一部の学生からは「毎日書くのが大変」「同じことを書くところが多い」など負担感の表出もあったが、「書くことが楽しい」との声多く、

記入していない学生はいなかった。

2) 臨床指導者の受け止め

実習終了後、臨床指導者から得られた感想によると、臨床指導者が最も大きい変化だと感じていたのは、学生が1日の体験を通して、学んだと実感したこと、考えを深めたこと、困難、不安、喜びが「生の声」として伝わってくることであった。以前の記録では、1日のまとめは模範解答的で抽象的な記述であり、学生が何に着目し、それらをどう捉えたのかが見えにくかったが、今回導入したインパクトシートでは、「学生が考えたことが学生の言葉で具体的に表現されるようになった」との意見があった。また、「毎日の目標が具体化・焦点化されているため、目標達成が確認しやすく褒めやすくなった、適切な助言ができた」等、実習指導を支援するツールとしての評価は高かった。

一方で、学生が記述する内容が多くなるため、それを確認する臨床指導者や担当看護師の負担増が懸念されたが、実習後の臨床指導者との検討会では「むしろ沢山書いているほうが実習が充実している様子うかがえ、こちらも安心できる」「読むのが楽しい」と肯定的であった。

3) 教員の受け止め

教員が大きな変化だと感じていたのは、学生の1日の振り返りが具体的に設定された目標を評価する形で行われていることであった。目標に照らし合わせて「今日はどのような経験をしたのか」「達成度はどうか」「課題はなにか」を意識した目標の評価が記述されており、その内容が翌日の目標の明確化につながっていると感じた。その他としては、実習内容・学生の心理状況、看護師・指導者との関係性がインパクトシートに反映されている印象が大きかった。それゆえ、臨床指導者・教員と学生の間で緊張が強い場合、内容が表面的になり、いわゆる「生の声」が出てこない傾向があったと捉えていた。

2. ポートフォリオによる実習の振り返り

1) 学生の反応

実習中、自己のポートフォリオに挟み込まれている資料や記録類の下書き、インパクトシートを見ながら、「今週はこういうこと（嬉しいこと・大変なこと）があった」「これをこんなに頑張った・工夫した」等の発言がみられた。ポートフォリオ

を見返すことで実習を頑張った実感が得られ、学生自身が「実習を頑張っている」と肯定的な気持ちを持ちやすくなっていた。

ポートフォリオを最初のページから追って行くと、具体的な事実の記載、日々考えたこと、成果物を概観することになり、実習全体を俯瞰して捉えることが可能となる。「実習内容を綿密に思い出すことができる」「あの時の自分はこんな風に考えていたのかと思い返したりできる」「自分の看護観の変化が感じられた」「自分がどんな風に変ったのかがわかる（見えていることだけに着目→見えていないことをどうするかを理解できた自分）」等の言葉から、自己学習の進捗状況の確認、看護過程展開に関する客観的な自己評価、自己の看護観の変化、今後の課題・展望を明確に意識するようになったことがわかった。

2) 臨床指導者・教員の受け止め

関連資料等の挟み込みも確認できるため、学生の自己学習の進捗状況がわかりやすくなったと感じていた。

ポートフォリオのファイル全体を見ることで、学生が問題に思っていることは何か、その解決のためにどう取り組んだか、その結果解決できたかどうか、学習の過程がつかみやすく、学生を指導する際のポイントやタイミングを考えるうえで役立つという意見が聞かれた。

3. 成長報告書

1) 学生の反応（表2参照）

「成長を書き出すことで成長したという実感が湧く」「看護観の変化の振り返りに役に立った」「自分の変化や次の課題・今後の展望を見出すことへとつながった」等、実習での学びを整理し、成果・成長の確認、今後の課題・展望を明確化できていた。

2) 教員の受け止め

成長報告書を記述することで、実習終了時の面接の際、自分の成長を具体的に自分の言葉で説明ができ、成長報告書によって学生の実習の到達度、学びが明確な形で共有できるようになったと感じていた。また、成長報告書の内容は、カンファレンスやレポートとの成果が反映されていたことが分かるものであったと捉えていた。

V. 考 察

以上のことから、ポートフォリオ活用の教育的効果として明らかになったことは、学生の学習過程の可視化が可能となること、リフレクションツールとしての効果、成長の可視化や今後の展望の明確化が可能となることであった。以下、それらについて考察する。

1. 学習過程の可視化

「学んだと感じたこと」「困難に感じていること」が学生自身の言葉で表現され、学生の着眼点、思考過程がわかりやすくなった。また、資料等の挟み込みから学生の学習進捗状況が把握しやすくなった。それらの情報を学生・臨床指導者・教員の三者で共有することにより、指導者と教員が連携して「学生なりの答えが出るまで待つ」「ここは臨床看護師の支援が必要」といった指導を効果的なタイミングで行うことができた。このような教育実践の積み重ねを踏まえて臨床指導者らと共に実習指導案の修正を検討し、学生の準備状況を考慮した介入の強化やそのタイミングなどについて、実習指導案改善につなげることができた。今後は、学生のポートフォリオを実習指導のあり方の検討のために活用する方法を臨床側と協働して模索していきたい。

2. リフレクションツールとしての効果

1日のまとめとしてのインパクトシートでは、提供した看護技術の振り返りや患者の言動など自己の看護実践内容に関わるものも詳細に記載されており、それをもとに翌日の実習目標を設定するなど1日単位でのリフレクションツールとして役立っていた。インパクトシートは学生が自身の実習内容を客観的に評価する力を身に付け、PDCAサイクルを実践するツールとして有効であると考えられる。さらに、インパクトシートや自己学習のメモ等が挟み込まれているファイルを学生が見返すことによって、週単位での自己の学習過程や成果、残された課題が目に見える形で確認でき、自己の努力や成長が実感されるという効果もみられた。

3. 成長の可視化・今後の展望の明確化

実習終了時の面接の際、成長報告書をもとに学生の実習の到達度、学びが明確な形で共有できることは、実習状況を把握するうえで大きな情報となり、実習指導案の検討材料とすることができた。成長報告書の内容は、カンファレンスやレポートの成果が反映されており、カンファレンスやレポートで自己の体験を言語化・概念化していく過程で看護現象を理解し自分の言葉で説明できるようになったことが確認できる。

ポートフォリオ全体を俯瞰し成長を書き出すことは、学生にとっては客観的な視点で自身の成長と今後の課題や展望を明確化することになるため、あらためて自身の成長を実感したり、次の課題や展望に向けた具体的な準備につながるという効果がみられた。

4. 実習環境の影響

効果的なリフレクションのためには、ありのままの自分の考えや思いをシートに書き出すことが重要であるが、インパクトシートの内容は実習内容・学生の心理状況によっては、率直な記述にならない。その要因の一つは、先行研究において指摘されているように、学習過程におけるリフレクティブな記述の秘匿性が学生の大きな関心であり、それが不安や当惑という感情を引き起こしている³⁾ことが挙げられる。このことに照らせば、インパクトシートの記入に対する学生の負担感の訴えは、「実習がうまくいっていない自分」を客観視したり記述することへの拒否的感情および記述内容を評価されることへの不安の表出とも考えられる。したがって、「そういった否定的な感情も率直に表現してよいことや、それが評価には影響しないことを伝える必要がある」⁴⁾。もう一つ考えられる要因は、学生と臨床指導者・教員との関係性が表現の自由度に影響していることである。臨床指導者・教員と学生の間で緊張が強い場合、記述内容が表面的になり、いわゆる「生の声」が出てこない傾向があった。これらのことから、学生のポートフォリオの記入内容は、臨床指導者・教員にとって、学生の不安や当惑、実習環境の状態を表す一つのバロメーターになるとも言える。学生が安心して自由に感情を表現できる実習環境を臨床指導者・教員が協働して整えていくことが重

要であると考ええる。

本実習では、ポートフォリオの記述内容は評価の対象にしていけないが、ポートフォリオはプログラムの効果検証のみならず、個々の授業の総括的評価や形成的評価にも積極的に活用が図られる必要性があり、教学内容に関して check から action への展開を可能とする鍵となることが認識されている⁹⁾。総括的評価や形成的評価へのポートフォリオの活用にあたっては、学生の率直なりフレクションを妨げないような方法を今後、検討していきたい。

VI. 今後の課題

今回の報告を通して、ポートフォリオの効果的な活用のためには、ポートフォリオそのものの検討だけでなく、実習環境の整備も重要であることが示唆された。このことを踏まえ、今後の課題として、以下の点を挙げる。

1. スムーズに運用できるように、実習前に学生、指導者に十分に説明を行う。
2. 臨床指導者と連携し、学生がのびのびと主体性を持って学習できる実習環境を整備していく。
3. 学生の実習における困難・今後の課題を分析し、よりよい実習指導のあり方を検討していくためのツールとして活用する方法を模索していく。
4. 総括的評価や形成的評価へのポートフォリオの活用にあたっては、学生の率直なりフレクションを妨げないような方法を検討していく。
5. 今回の結果から、ポートフォリオ導入は実習の振り返りに有効であることは明らかとなったが、その他の教育的介入が関連していることは十分に考えられる。今回の報告ではその点は明確にはできないが、今後、ポートフォリオと実習指導案が相乗効果を果たせるような実習設計が必要である。

VII. おわりに

本実習で使用したポートフォリオは実習での学習過程において、学生自身が自己の看護実践とそれがもたらした看護現象を客観的事実として把握すること、課題を明確化すること、そしてその課題解決に様々な資源を使って取り組むことができるツールとして有効であると考えられる。看護職者としての基礎能力の育成において、最も大切なのは、学生の側に看護実習等の看護実践体験を通して、看護事象を理解する基盤ができてきていることである¹⁾とされている。成長報告書や学生の発言内容から、本実習の取り組みはそのような基盤形成に確実に繋がっていると評価できる。

今後は、今回明らかになった効果と課題を踏まえて、臨床側と協働しながらポートフォリオを含めた実習内容の改善を重ねていきたい。

利益相反の有無：本論文について他者との利益相反はない。

引用文献

- 1) 文部科学省高等教育局医学教育課看護教育係. 学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討委員会最終報告. 2011.
- 2) 鈴木敏恵. 看護師の実践力と課題解決力を実現する！ポートフォリオとプロジェクト学習. 東京：医学書院；2010：276-289.
- 3) Langan,L., Prendergast,M.田村由美訳. 理論・研究・実践を統合するリフレクションーリフレクションとポートフォリオの看護実践における活用 学生の看護経験からー. 看護研究. 2008；41 (3)：213-216.
- 4) 坂上明子, 谷本真理子, 増島麻里子他. 看護実践能力自己評価ポートフォリオの改訂に向けた取り組み. 千葉大学大学院看護学研究科紀要. 2013；35：15-20.
- 5) 沖裕貴. 大学におけるルーブリック評価導入の実際ー公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指してー. 立命館高等教育研究. 2014；14：71-90.

要 旨

本学看護学科 3 年次の成人看護学実習（慢性期）において、リフレクションの強化を図るツールとしてポートフォリオの導入を行なった。

ポートフォリオの活用後の感想から、学生は自己の実習を客観的に振り返り、自分の成長を実感できていたことが明らかになった。臨床指導者は、学生が学んだこと・考えを深めたこと・困難・不安・喜びが可視化できるようになり、具体的に指導しやすくなったと感じていた。教員は、学生の日々の目標設定やリフレクションが具体的になった、学生の自己学習の進捗状況がわかりやすくなったと感じていた。

以上のことから、ポートフォリオは、実習における学習過程の可視化、リフレクションに効果的なツールであることが明らかになった。

今後の課題としては、実習環境の整備を含めて、学生・臨床・教員の三者で検討しながら効果的な活用方法の模索を図りたい。